

沖縄県青年海外協力隊を支援する会会報

(題字：末次一郎氏)

# はいむるぶし

(沖縄県八重山地方の方言で南十字星の意)

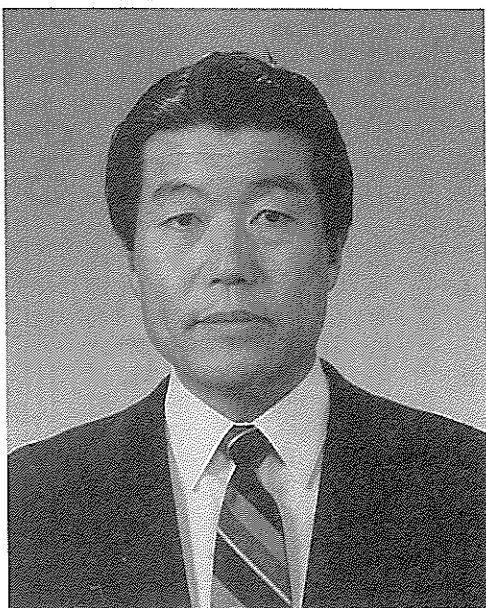
第2号

〒901-21 沖縄県浦添市前田1143-1  
国際協力事業団沖縄国際センター内  
TEL 098-876-6000(代)  
沖縄県青年海外協力隊を支援する会  
発行責任者：事務局長 平川宗隆

## 『支援する会に期待する』

今年協力隊が始まって三十年になる。第一陣は昭和四十年に派遣された訳である。昭和四十年といえば、戦後の高度経済成長期の直中とはいえ、まだまだ海外へ出かけていく日本人は少なかった。その当時、隊員として海外へ出て行った若者達は並外れた進取の気性と気概に富んだ青年達であったと思われる。協力隊を送り出す社会的背景も現在とは異なるものであったと思われる。そのような時代に、選ばれて派遣された隊員達は一種のエリートであったということが出来る。その後の協力隊の発展振りとその高い評価は、その草創期に当時としては不透明であった協力隊の道をしっかりと切り拓き、確固たる礎を築いてきた彼等OB、OGの活躍に負うところが大きいものと思われる。

その後三十年間に派遣された隊員は一四、〇〇〇名を超えている。これは日本の国造りにとっても大きな力となり得る勢力である。



沖縄からは昭和四十三年に最初の隊員が三名派遣されている。本土復帰前のその当時に、協力隊に参加した沖縄青年がいたことは、頼もしい限りである。その後二十七年間に一四五名の沖縄青年が協力隊スプリットを受け継いで隊員として参加した。最近では他府県に比べ、協力隊を志す沖縄青年男女が目立つて増加する傾向にある。これは県民の総合力や勢いといったものが大きくなりつつある一つの現れとみることが出来る。

沖縄青年のこのような前向きな意識や国際的な活動を積極的に支援、助長していくことが望まれる。次代を担う青年達が国際貢献の体験を通じ、国際性や協調性、忍耐力、思いやり、責任感等を身につけて帰ってくる。隊員達が身につけて帰るこれらの資質は、二十一世紀の沖縄の県造り、日本の国造りに真に必要な資質である。

引き続き新しい隊員を派遣し続けることと同時に、帰国したこれらOB、OGの地域社会における活用が課題である。彼等の持ち帰った貴重な経験と資質とを隊員個々の財産とするだけでなく、地域の共有財産として活用することが、地域社会の村造り、町造りにとって重要である。

「支援する会」が設立され、一年を迎えることとなった。一年目は、会の基礎造りが行なわれた。二年目からはいよいよ活動期に入る。稲嶺会長のリーダーシップの下、本格的活動の展開が大いに期待される。

国際協力事業団沖縄国際センター前所長  
沖縄県青年海外協力隊を支援する会顧問

松本宣彦

# はいむるぶし

## 現職参加による

### 隊員派遣について

創刊号では、(株)りゅうせきのボランティア休職制度を紹介したが、今回はこのように会社に独自の休職制度がなくても、現在の職場を休職のかたちで、所属先に身分を残したまま協働隊に参加できる現職参加制度のことを国際協力事業団・沖縄国際センター・協力推進室の比嘉伸好参事に寄稿してもらった。

現職参加制度とは、現在勤めている人が休職などのかたちで所属先に身分を置いたまま協働隊に参加できる制度のことです。協働隊に参加した隊員がスムーズに日本社会に復帰できることを考慮すると、この現職参加制度は帰国隊員の貴重な海外経験を国内に還元しやすいことから、より一層の拡充が望まれる形態だと言えます。

国際協力事業団では、協働隊への参加希望者がより参加しやすい環境作りのために、所属先に対して人件費などを補填(最高七十%)する制度を設け、企業や自治体など関係方面に対し「現職参加」の促進をお願いしています。

平成五年度は五十三カ国へ九八二名の隊員を派遣しましたが、そのうち、現職参加は二二二名(二二%)、退職参加者が五一〇名(五二%)、無職者二四〇名(二五%)となっています。

民間企業では、NTT、松下電気産業、東芝、東京電力、関西電力、他一〇四社から一三四名が現職参加で派遣されていますが、この事業が開始されてから今年までの累計は九一

二社に上っています。

沖縄県は昭和四十三年の事業開始以降、現在までに一四五名の隊員を三七カ国へ派遣しました。

内、現職参加者は沖縄県庁(十九名)、那覇市役所(二名)、名護市役所(一名)の計二十一名で、残念ながら民間企業からの現職参加はまだ出ていません。

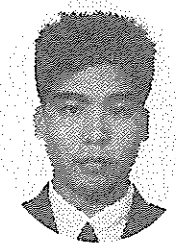
国際協力に対する県民の理解が一層深まってきました。県内でも(株)りゅうせきがボランティアを目的とした休職制度を昨年初めて導入しました。これを機会に県内の多くの企業にこの制度を導入して頂き、開発途上国へのボランティア活動についてご支援、ご協力頂きますようお願いいたします。

なお、詳しいことやお問い合わせについては、国際協力事業団・沖縄国際センター・協力推進室、参事・比嘉伸好又は国内協力員・幸喜仁までご連絡下さい。

TEL (098) 876-6000(代)  
FAX (098) 876-6014

### 新隊員紹介

平成六年度第二次隊としてこの程、次の二隊員が、ネパールへ赴任した。両隊員とも職種は「果樹」。



高橋 行 福 稲



大 城 直 也

# はいむるぶし

## 報告「協力隊現地視察の旅」

昨年の九月五日から十二日にかけて、(社)協力隊を育てる会主催の平成六年度協力隊活動現地視察の旅・インド洋コース(スリランカ) 団長として参加した森田直美OGにレポートしてもらった。

スリランカで協力隊員として過ごした二年間から既に七年の時が過ぎていた。視察の旅の引率とはいえ、隊員時代お世話になった人々に合いにくいことをひたすら楽しみにして、エアランカ機に乗り込む。

スリランカは成田から直行便で約九時間のインド洋に浮かぶ小島である。丁度日本の北海道を少し小さくしたくらいで、全島緑に覆われた大変美しい島である。

さて、視察の旅の自由時間に、協力隊時代、下宿生活でお世話になった家へと向かうことになった。近くのバス停まで、下宿先のお父さんが迎えに来てくれたが、な・な・何と……:自家用車で……。しかし下宿先迄の道のりはほとんど七年前と同じであった。

家に着き、お母さんと一人娘(当時十二歳)が昔と同じ顔で出迎えてくれた。一言二言会話を交わした途端、もう七年間のブランクは埋まってしまったかの様であった。

私も相当シンハラ語を忘れていたはずだが、何故かべらべら喋りまくっていた。

蚊帳やベッドなど当時使っていた部屋もそのまま以前と変わりなかった。ただ、初日の自家用車での出迎えもそうであるが、生活が向上したことを伺わせるものが幾つか増えていた。電話・冷蔵庫・ビデオデッキ……:そして、毎日、体に布を巻き、外の井戸で水浴びをしていたが、今はモーターで水を家の中に引き上げ周囲の視線を気にすることなく大胆に水浴びができるシャワールーム……:etc.

しかし、食事中的フツと電気が消え暗くなった時には「あつ、

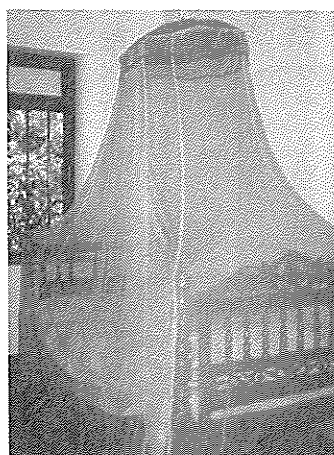
これがスリランカだ……:と懐かしさがこみ上げてきた。食卓には、帰国後幾度となく夢にまで見た辛いスリランカカレーが並び、歓迎攻めにあい、あつという間に二日間が過ぎてしまった。

そして、七年前と同じように再度別れの時がおとすれた。「また会えるよ」という強い思いと、いつ来てもすんなり家族として受け入れてくれるという安心感とで私の心は満たされていた。保存のきく家庭料理の瓶詰、赤い米、ちよつと辛い子供用のビスケットなど、スニツケースの中はスリランカの匂いで一杯であった。

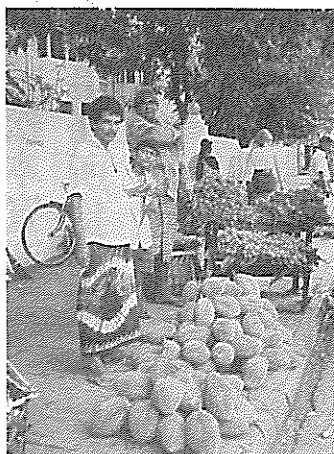
たった二年間の協力隊活動がこんなにもその国との強い絆を残してしてくれたとは、自分でも気づかなかつたことで大変嬉しい発見であった。



▲お世話になったゴールの下宿先の台所。



▲協力隊時代の私のへや。ベッドとカヤはそのまま。



▲コロンボ市内。ドリアンとランブータン。



▲ゴールの下宿先。水浴びをしていた井戸。

# はいむるぶし

## トピックス

### 三十歳を迎える青年海外協力隊

昭和四十年四月政府事業として発足した青年海外協力隊（JOCV）は、今年で三十歳を迎える。事業の実施は当時の海外協力事業団に委託され、同事業団の中に日本青年海外協力隊事務局が設置されていた。

昭和四十九年八月、日本政府の国際協力の中央実施機関の一つとして国際協力事業団（JICA）が発足し、その重要な事業の一つとして受け継がれ、名称も「青年海外協力隊」となり、今日に至っている。

ラオスへの初派遣から始まったこの事業は、発足以来三十年間で五十九カ国（アジア、アフリカ、中近東、中南米、大洋州、東欧）に計一四、四五〇名（平成六年十二月三十一日現在）の隊員を派遣している。

現在、派遣中の隊員は二、二六〇名、派遣国は五十二カ国に上っており、その活動は七部門約一六〇職種にわたっている。

協力隊事務局では、三十周年記念事業として、記念式典、国際協力キャンペーン、記念冊子、記念写真集、記念切手の発行等盛り沢山の事業を計画している。

本会に対しても協力依頼が内々きており、会員一同の絶大なご支援・ご協力をお願いしたい。

### 平成六年度総会日程決まる

沖縄県青年海外協力隊を支援する会の平成六年度総会が、(社)協力隊を育てる会副会長末次一郎氏をお迎えして次の日程で行されることが決まった。

日時及び場所：平成七年三月三十日

二時～三時 理事会（ミーティングルーム）

三時～五時 総会（オリエンテーションルーム）

特別講演（ ）

五時～七時 懇親会（セミナールーム）

### 沖縄国際センター前所長・松本宣彦氏

#### ブラジル事務所に転任

平成四年一〇月から国際協力事業団沖縄国際センター所長を務めた松本氏は二月一二日付けで同事業団ブラジル事務所長に転任した。

松本氏は温厚、篤実な性格で職員、国際協力関係団体、協力隊OB等の信頼も厚く、今回の異動に際し留任運動の気運も高まりつつある最中のことで、惜しまれての転勤である。松本氏は本会設立に際しても尽力され、顧問として活躍された。

なお、後任の沖縄国際センター所長には、同事業団ペルー事務所長の加藤進氏が就任したが、松本氏の後任として本会顧問に就任する予定。

## 事 務 局 だ よ り

### 二月

二日 当会顧問・松本宣彦氏壮行会（つりす  
ん） 稲嶺会長、儀間、福地面副会長、  
善平、川満両運営委員、平川事務局長

### 三月

二日 沖縄国際センター総務課課長代理・筒  
井昇氏壮行会（次郎長） 平川事務局  
十日 平成六年度協力隊員留守家族懇談会（国  
際協力事業沖縄国際センター）  
稲嶺会長、金城理事、長浜運営委員、  
平川事務局長